

森川茂講師昇任に当っての紹介

安 平 公 夫

昭和37年3月、京都大学医学部を卒業。医学実地研修1ケ年の後大学院医学研究科に入学。病理学を主課目として浜島助教授(現日大教授)のもとに、螢光抗体法による免疫病理学に専心。この間核酸代謝の研究の一助として、RNaseの組織化学的検出法を完成、J. Histochem. Cytochem. に数篇の論文を発表、内外の注目を集めた。42年3月大学院退学と共に胸部研助手となり、病理部に勤務。間もなく渡米し、ハーバード大学病理学教室の教授 Dr. A. H. Coonsのもとで2ケ年研究に従事。その間螢光抗体法を駆使して抗体産生機構の解明に当り、感作の初発機構として、抗原受容細胞が胸腺に出現することを明らかにし、Coons氏と共にその概要を Science (1970) に発表した。45年8月帰朝以来、免疫学研究グループの有力な指導者となり、免疫発生機構の細胞レベルでの解析を推進すると共に、最近では遅延型免疫にも興味を持ち、来春の結核病学会総会シンポジウム演者の一人として、この方面にもその研究領域を拡げようとしているところである。

森川君は滋賀県大津市の出身。滋賀県人に多い鋭い刃物の切れ味をみせる反面、情に厚く、また後輩の指導にも熱心且つ有能である。従って君を中心に若い研究者、学生が喜んで研究グループを形成する一方、彼の有する螢光抗体法という技術を求めて集まってくる友人達に、そ

の遠近を問わず可能な限りでの援助をし、これによって研究上での交りの輪が次第に広がってゆく此の頃である。酒に強く、座談に長け、包容力の強い、申分のない君の性格に、今一つの希いが許されるとあらば、それは将来、自然科学以外の分野における人間としての教養を充分身につけてほしいことである。

— ○ —

事のついでに、講師選考に関する事情の一部に触れておきたい。今回の選考は基礎系教官全員で行われ、先づ選考方針の討議、次で選考委員の選出、委員会の選出した候補者に対する認証、候補者の教授会への提出の順序で選考が進行した。ここに言及したのは選考方針に関する討議の一部である。度重なる討議の後、研究分野として細胞生物学、免疫学と決定された。当研究所在籍者の中でも、この領域に関係する有力な数名の研究者があり、選考は種々の問題に直面したが、最終的に森川君が選出されたものである。この間に行われた確認事項に則り、森川君は一応病理部所属の形で研究を行うも、本来は基礎系各部門に共通する研究グループを形成すべきものであり、今後どのような形でこれを明らかにすることが出来るか、これが森川君に課せられた課題である。

1972. 9. 28